

## 海上の森講座

海上の森から考える 里山・人と自然のかかわり（現地講義）

日時：平成26年7月19日（土） 10:00～15:00

講師：木村 光伸（名古屋学院大学リハビリテーション学部教授）

### 概況



「海上の森講座」 海上の森から考える里山・人と自然のかかわり  
講師：名古屋学院大学リハビリテーション学部 教授 木村 光伸

#### ○午前：座学、現地講義

##### ・座学

海上の森は生物多様性に富んでいるが、「小さなまとまりとしての多様性」であり、生態系の宝庫であるが、小さく壊れやすいという特徴をもっている。

「里山」について考えるときは、色々な角度で見、疑問を持つことが大切である。その上で、いつも山に来る人の感覚など、みんなの意見を時間をかけてまとめるようにし、森・里・人のすべてを守る必要があることを念頭におかなければならない。

また、自然保護をする場合、人が手を加えるやり方があるが、必ずしもそれが良いというわけではない。「山が荒れている」と感じることもあるが、それは山が自然を取り戻す1つのプロセスであり、どれくらいのスパンで考えるのかが重要となってくる。

##### ・現地講義

吉田川沿いの林道から屋戸湿地、古窯跡を通るルートにおいて、アカメガシワやアラカシ、シデコブシ、ウルシ、サカキ、ヒサカキ、ソヨゴ、コバノミツバツツジ、タカノツメ、アセビ、アオキなどの樹木、イノシシなどの動物、砂礫層などの地質、各場所におけるようすについての全般的な説明がなされた。

○午後:座学

「里山」という言葉は、1960年代に「奥山」に対比してつくられた言葉であり、農山村集落の後背地に展開する有用林などを意味するが、美しい里の背後で、放置された二次林も存在している。放置された二次林は生物多様性が高い、という特徴があるが、管理する方法は、人が手を加えることや、完全に自然な状態で手を加えないことがある。しかしながら一長一短であり、うまくいくかどうかは場所によって異なる。自然の回復力は意外と高く、特に日本の自然は復元しやすい。ポテンシャルを考え、大胆な管理をする必要がある。

海上の森の場合、地形・地質構造が全てを支配しており、崩壊する山体が生物の多様な生活場所を形成している。落葉樹林が常緑化すると、遷移の段階で植生を構成する種数が減少する可能性があり、近隣に常緑広葉樹林相が欠落している場合は深刻であるかもしれない。保全と活用をするためのキーワードとして、貴重種や生態環境など「海上の森で守るべきもの」、協働や市民活動など「だれが守るのか」、継続的な体験学習の場づくりなど「継承される経験」が重要である。